

懷風藻の對語について

菅 野 禮 行

一、はじめに

懷風藻の成立(七五^{注1})の後、平安初期に入つて間もなく凌雲集(八一四?)・文華秀麗集(八一八?)が相ついで成立した。^{注2}その後、天長四年(八二七^{注3})に經國集が成立する。本邦最初の漢詩集である懷風藻に對句が多い。懷風藻に全詩を對句で構成するものもある。^{注4}そこで、小論では懷風藻より文華秀麗集までの對句、特に對句中の相對應する語の對比的性格を考えることによつて、上代詩から平安初期の詩への詩風の變遷の一端を見ようと思う。經國集は、序文によれば奈良時代の慶雲四年(七〇〇)から平安時代の天長四年(八二八)までの詩文を収める。しかし、いちいちの制作年代を知ることには不可能に近いので、いまはこれを除外しようと思う。テキストには、懷風藻は大野保博士の懷風藻の研究・校異篇、凌雲集・文華秀麗集には群書類従木版本を用いた。

二、述語的性格の語の對比

はじめに、句の中にあつてその句の情緒的な要素を左右すると思われる、いわばその句の中で比較的詩情の比重が重くと思われる語の所在について一考しておきたい。訓讀は日本古典文學大系本による。

聖豫開芳序

聖豫芳序に開き、

皇恩施品生

皇恩品生に施したまふ。

流霞酒處泛

流霞酒處に泛かび、

薰吹曲中輕。 薰吹曲中に輕し。

(下略)

(懷風藻・簡集宿禰蟲麻呂、侍讀)

右の詩において、附點を施した語はそれぞれの句の中にあつて、述語としての機能を果している語である。第二聯は情景描寫の部分である。第一聯に比して敍情が濃厚と考えられるので、第二聯の「泛」・「輕」の對比的性格を考えてみよう。まず、第二聯の大意は、流れただよっている霞が宴席のあたりにまつわりつくように浮かんでいるのであり、花の香を含んだ微風が管絃の音色に乗るようにして輕やかにそよいでいるというのであろう。上句は霞の定かならぬたたずまいのようすが「泛」という語で表現され、下句は芳香を帯びた風が曲の中に秘めやかに入り込むような感覚が「輕」というさりげない表現で的確にいわれているように思える。「泛」を「佇」に「輕」を「生」にそれぞれ置き換えても、全體としての意味はさして變りはないようであるが、詩情はまるで別なものとなつてしまふ。第一聯にしても「開」といい得ているところに、天子の徳の大らかさが感覺的に把握されて、この場合の「施」の語にはおのずから天子と臣下との間の上・下の感じが出ているのではあるまいか。このように對句においてくふうされる述語的な性格の語は、そのことば自體の意味内容よりも、どちらかといえばつりあひの感覺のもとにおける主觀的な判斷なり重みなりを、より多く伴う場合の方が普通である。そうしてみれば、述語的な性格の語はその句の有する情感を決定するすべてではないけれども、少なくともそれをよりの確なものにする感覺的要素を多分に持つているといひ得るであらう。詩轍・卷之五に「殘柳宮前空露葉、夕陽江上浩烟波。空浩ノ二字ヲ古人字眼ト言ヘリ。然マデ替レル事モナキ様ナレドモサラバトテ試ニ此二字ヲ置カヘ見ルベシ。其時コニコニ骨ヲ折タル事ヲ知ラン」とあるが、これも述語的性格の語の難かしさについて觸れたものであるう。

そこで、懷風藻・凌雲集・文華秀麗集の三集より抽出した對句中、述語的な性格の語の所在が明らかかなものについて、ある語が他のどのような語と對比しているか、その對比のしかたを調べてみると、大別して次の三通りになると思う。

A 概念的には同一範疇に屬し、指示的方向のみが反對であるもの。

いわゆる「的名對」(文鏡祕府論)で、異・同、輕・重などの如く、ある語に對して反射的に相對する語がすぐ思い浮ぶような對比で、親近性のものとも濃厚なものと考えられるもの。たとえば、

柳條風未煖。梅花雪猶寒。(懷風藻、鹽屋古麻呂・春日於左僕射長屋王宅宴)

鍾池超潭異。凡類、美稻逢仙同。洛洲。(同前、丹墀廣成・吉野之作)

放曠多幽趣。超然少俗塵。(同前・遊吉野山)

石壁蘿衣猶自短。山扉松蓋埋然長。(同前、藤原宇合、秋日於左僕射長王宅宴)

B 同一範疇ではないが、何らかの意味で共通の色彩が感じられるもの。

いわゆる「異類對」・「平對」・「同對」(文鏡祕府論)などはこれに屬する。たとえば、

葉落山逾靜。風涼琴益微。(懷風藻、中臣大島・山齋)

腰逐楚王細。體隨漢帝飛。(同前、荆助仁・詠美人)

稻葉負霜落。蟬聲逐吹流。(同前、大神安麻呂・山齋言志)

元首壽千歲。股肱頌三春。(同前、山前王・侍宴)

雲浮天裏麗。樹茂苑中榮。(同前、背奈王行文・上巳禊飲應詔)

舞衣搖樹影。歌扇動梁塵。(同前、安倍首名・春日應詔)

仙車渡鵲橋。神駕越清流。(同前、吉智首・七夕)

玉殿風光暮。金墀春色深。(同前、黃文備・春日侍宴)

C 語法的な共通性以外には全く何の關係も感じられぬもの。たとえば、

餘根堅厚地。貞質指高天。(懷風藻、中臣大島・詠孤松)

梅雪亂。殘岸、烟霞接早春。(同前、大伴旅人・初春侍宴)

對峰傾菊酒、臨水拍桐琴。(同前、境部王・秋夜山池)

琴樽叶幽賞、文華敘離思。(同前、調古麻呂、初秋於長王宅宴(新羅客))

對句中における述語的性格の語のすべてについて、Aのような同一の範疇で指示的方向のみが反對である語が存在するとは考えられない。それにしてもその割合は語自體に親近性の濃厚に見られるAの對比は意外に少なく、BおよびCの對比が壓倒的に多い。

奈良時代における懷風藻には、Aの對比が少ないのであるが、平安初期における凌雲集や文華秀麗集になると、後述するように、よりいつそう少なくなってくる。

まず、親近性の濃厚な述語的性格の語の對比Aについて、そのすべてを調べると懷風藻から文華秀麗集に至るまでには異・同、寒・暖(煖)、迎・送、輕・重、紅・綠(翠)、古(故)・新、難・易、白・緇、有・無、多・少、短・長の十一種類しかない。それらの對語を含む對句三十三例を所載集別に表示するとつぎのようになる。

對語	懷風藻	凌雲集	文華秀麗集
異・同	弱枝異高艸 茂葉同柱榮(中臣大島)		地勢風牛雖異域 天文月兎尙同光(桑腹赤)
寒・暖(煖)	泉石行行異 風烟處處同(民黑人) 庭煖將滋草 林寒未笑花 (百濟和麻呂)		花寒邊地雪 葉暖妓樓吹(嵯峨帝)

迎・送
葉黃初送夏。桂白早迎秋。(吉田宜)

輕・重
無爲聖德重。寸陰有道神功輕。球琳

(紀古麻呂)

紅・綠(翠)
湛露重。仁智流霞輕。松筠(安倍首名)
葉綠。園柳月花紅。山櫻春

(采女比良夫)

煙光巖上翠。日影潯前紅。(藤原史)

古(故)・新
夏身夏色古。秋津秋氣新。(藤原史)

梁前招吟古。峽上簧聲新。(藤原萬里)

年華已非故。淑氣亦惟新。(藤原史)

鹽梅道尙故。文酒事猶新。(紀末茂)

難・易
夢裏釣天尙易。浦松下清風信難斟

(紀古麻呂)

昔惜河難越。今傷漢易施

(百濟和麻呂)

柳葉依絲絲。櫻花拂舞紅。

(賀陽豐年)

防霞古松千載翠。待風花葉九秋紅。

(菅原清公)

松竹同宜古。鶯花併狀新。(賀陽豐年)

甚深知慧極難解。微妙因緣豈易量

(嵯峨帝)

岩冷花難笑。溪深景易嚙

(坂上忌寸)

御柳初暖。仰狎狎。帝梧猶寒。未易就

(桑腹赤)

送春薺棘珊瑚色。迎夏巖苔玳瑁斑

(淳和帝)

白・縞	岐路分衿易。 <small>(藤原總前)</small> 琴樽促膝難。 <small>(藤原總前)</small> 君道誰云易。 <small>(藤原萬里)</small> 臣義本自難。 <small>(藤原萬里)</small>	贅謝蟬兮垂白。 <small>(桑原宮作)</small> 衣懸鵝兮化縞。	水上浮萍豈有根。 <small>(朝鹿取)</small> 風前飛絮本無蒂。
有・無	城市元無好。 <small>(藤原萬里)</small> 林園賞有餘。 巖谿無俗事。 <small>(民黑人)</small> 山路有樵童。	班姬秋扇已無色。 <small>(嵯峨帝)</small> 孫子夜書獨有明。 忘筌無故友。 <small>(林姿婆)</small> 傾蓋有新期。	梵宇本無塵滓事。 <small>(嵯峨帝)</small> 法筵唯有薛羅僧。
多・少 短・長	放曠多幽趣。 <small>(丹墀廣成)</small> 超然少俗塵。 石壁蘿衣猶自短。 <small>(藤原宇合)</small> 山扉松蓋埋然長。		晨晷敧無駐。 <small>(菅清公)</small> 春花落有期。

親近性の濃厚な語の對比が、各集に所載する詩の中で、少ないながらも、凌雲集・文華秀麗集に比較すると、懷風藻にはまだ多いことが知られる。つまり、親近性の濃厚な語の對比が時代を下るにつれて減少して行く傾向にある。換言すれば、親近性の薄い述語的性格の語の對比が時代を下るにつれて増加している。

そこで、そのような對比の質の變化の意味を解くために、一見して親近性の稀薄な語の對比（特にCに屬するものについて）がいかにして構成されているかを考察してみよう。

さきに述べたように、一般に對句中における述語的な性格の語は、平安初期に至るまで程度の差はあるにしても意味内

容の疎遠な語の對比が普通であつた。しかしながら語は句から切り離して單獨にそれだけを取り出してきたのでは、一つの約束された意味のみを持つ存在でしかあり得ない。それが文中に、特に詩などに用いられた場合には、ことさらに情的に幅のある、感覺的な要素をより多く含むものとなつてくる。比喩的にいえば、血の通つた生きた言葉となることができるものと思われる。

そこで、さきに句から取り出した語のいくつかを再び元の句に返してみたいと思う。句の選擇に當つては、特定の詩人に偏しないように注意しつつ、その作者が最も意を用いたと思われるものを取りあげようにしたい。しかし、親近性の稀薄な語の對比といつても、實はBとCとの限界は誠に微妙なものがあるので、頻度數が二回以上ある語について、比較の上で親近性の稀薄な語を取りあげることにした。たとえば、「動」は「搖・出・愛・低」の四語との對比例を見出せるが、動・搖の對比よりも、動・出、動・愛、動・低の對比はそれぞれ多少の程度の差はあつても親近性が稀薄だと考えられる。訓讀並びに本文は小島憲之博士の日本古典文學大系による。また、以下同博士の注によるところが多い。

(1) 山中猿吟斷、葉裏蟬音寒。

この聯は、次の詩の第三聯である。

職貢梯航使、

從此及三韓 此より三韓に及ぶ。

岐路分袂易、

琴樽促膝難 岐路袂を分つこと易く、
琴樽膝を促むること難し。

山中猿吟斷、

葉裏蟬音寒、

贈別無言語、

贈別に言無し、

愁情幾萬端

愁情幾萬端ぞ。

(藤原總前・秋日於長王宅宴新羅客。賦得難字。)

この詩は長屋王の邸宅で新羅の使を送る宴席に侍し、別離の情を述べたものである。従つて山中の猿吟も葉裏の蟬音も實際には聞こえていないのかも知れない。惜別の情の感覺的な表現であらう。職貢は、みつぎものことであり、梯航使は、みつぎものを持つて海山をはるばるやつてきた新羅の使者である。旅中の邊境にあつて苦しむ使者への思いやりと自分の惜別の心境とが重なり合つて「山中猿吟斷、葉裏蟬音寒」という表現になつたのであらう。猿吟斷について小島博士は「猿吟は、林本・寛本校異・詩紀など『猿叫』に作る。漢詩にこの例は多く、この本文に従うものも多い(澤田注・世良注・林注など)。しかし、挂藤疑欲飲、吟枝似避弓(陳蕭詮、賦得夜啼猿)。連山驚鳥亂、隔岫斷猿吟(唐太宗、遼東山夜臨秋)。誰知繫在黃金索、翻畏侯家不敢吟(唐張喬、猿詩)。夾巷長門似海深、楚猿爭得此中吟(唐吳融、長安里中聞猿)など、猿の啼くことを『吟』ともいい、底本の文字で差支えない。斷を語助と見て『猿吟斷』を猿吟(猿が吟叫する)の意とみる説もある(私注・懷風藻新註)が、文字通りに解してよい(駱賓王、『自憐疎響斷、荒林夕吹寒』)。なお『斷……寒』はこのによる詩か」と述べておられる。斷を語助と見なければ、結局は「なきやんだ(あるいは、ないていない、ないてゐる)」の對比であり、蟬音を「寒」と表現することによつて作者のさむざむとした心象までもいい得て、「庭燠將滋草、林寒未笑花」の觸覺的な對比よりも、よりの確な感覺描寫となり得ている。

(2) 絲竹退廣樂、率舞治往塵。

全詩は

玉燭凝紫宮

玉燭紫宮に凝り、

淑氣潤芳春

淑氣芳春に潤ふ。

曲浦戲嬌鵲

曲浦嬌鵲戯れ、

瑤池躍潛鱗

瑤池潛鱗躍る。

階前桃花映

階前桃花映え、

塘上柳條新

塘上柳條新し。

輕煙松心入

輕煙松心に入り、

嘯鳥葉裡陳

嘯鳥葉裡に陳く。

絲竹遏廣樂

絲竹廣樂を遏め、

率舞洽往塵

率舞往塵に洽し。

此時誰不樂

此の時誰か樂しまざらめやも。

普天蒙厚仁

普天蒙る厚き仁を。

(美努連淨麻呂、春日應詔)

應詔の詩であるだけに、治まれる太平の世を謳歌しようとする意圖が、あからさまにうかがわれ、思いつく限りの美辭を並べたてている。曲浦・瑤池・階前・塘上・輕烟・嘯鳥・絲竹・率舞などの語はすべて「玉燭凝紫宮、淑氣潤芳春」を受けて、天子との關連において作者は意識しているのであろう。「絲竹遏廣樂、率舞洽往塵」はそのような意識で、宮中の様子を讚美的に歌おうと意圖した聯に外ならない。「ここで奏する管絃の樂は天上の廣樂をここに留めているようにすぐれ、また楽しくつれだつて舞う舞は過去(前人・前代の意)の事蹟よりもすぐれている(小島博士注)」の意である。「洽」や「遏」の例としては懷風藻に次ぎのごときものがある。

至德洽乾坤、清化朗嘉辰(山前王・侍宴)

雕雲遏歌響、流水散鳴琴(黃文備・春日侍宴)

帝德被千古、皇恩洽萬民(息長臣足・春日侍宴)

これらの例でも知られるように、「遏(止也)辭海」に對して、「洽」はひろがりの感じを持つ語である。ところで「洽・遏」の對比は、時間的な切斷面と空間的なひろがりの對比である。「流」と「止」との對比ほど親近性が感じられない

のは、この詩の場合、「過」に時間的な要素があり、「拾」に空間的な要素があつて、その兩者に意味的なズレがあるからである。そのズレが介在していることを感得する點に對句の面白さがある。そのためにかえつて親近性が感じられる結果になると思われる。

(3) 浮沈烟雲外、攀翫野花秋。

全詩は

欲知間居趣

間居の趣を知らまく欲り、

來尋山水幽

來り尋ぬ山水の幽きことを。

浮沈烟雲外

浮沈す烟雲の外、

攀翫野花秋

攀翫す野花の秋。

稻葉負霜落

稻葉霜を負ひて落ち、

蟬聲逐吹流

蟬の聲吹を逐ひて流る。

祇爲仁智賞

祇仁智の賞を爲さまくのみ、

何論朝市遊

何ぞ論らはむ朝市の遊。

(大神安麻呂、山齊言志)

これは浮沈と攀翫との熟語の形で考えなければならない。この聯は小島博士注によれば「霧や雲のかかる外界を出没し(さまよい)、野の花の咲く秋をめでの。」の意。さまようのは攀翫するためである。字面では何の關係もなさそうに見える浮沈・攀翫の對語であるが、山野をさまよう態度を「浮沈」という語でより印象的に描寫している。上句から下句へと讀んで行き、下句を讀み終つたときに再び上句の對語を想起(または、その印象をもとに)して、その關連で上下句の對語の深切さを感じるのは對句一般にいえることであるが、これはそのかつこうの例であらう。

(4) 下宴當時宅、披雲樂廣天。

全詩は

縦賞青春日

縦賞す青春の日、

相期白髮年

相期す白髮の年。

清生百萬聖

清は生む百萬の聖、

岳出半千賢

岳は出す半千の賢。

下宴當時宅

宴を下す當時が宅、

披雲樂廣天

雲を披く樂廣が天。

玆時盡清素

玆の時盡清素、

何用子雲玄

何ぞ用るむ子雲が玄。

(刀利宣令・賀五八年)

この詩は、長屋王の四十の賀の宴での作である。第二・三聯で長屋王をたたえる。「下宴」の主語は左大臣長屋王であり、「披雲」は披霧と同じで人に會うことを敬つていう場合に用いる語(大野博士注)であるから、その主語は正六位上(原本に位階明記)の作者である。そこに身分關係の差が感得せられるとともに、披雲という語自體にも對象の存在を暗示させる響きがある。

(5) 隱逸去幽藪、沒賢陪紫宸。

全詩は

淑氣光天下

淑氣天下に光らひ、

薰風扇海濱

薰風海濱に扇る。

春日歡春鳥

春日春を歡ぶる鳥、

蘭生折蘭人

蘭生蘭を折る人。

鹽梅道尙故

鹽梅の道尙し故り、

文酒事猶新

文酒の事猶し新し。

隱逸去幽藪

隱逸幽藪を去り、

沒賢陪紫宸

沒賢紫宸に陪る。

(藤原史・春日侍宴、應詔)

沒賢は、作者の造語であろうか、あまり例のない用語である。不肖の私の意(大野博士注)に解釋しておく。小島博士は「沒は俗語か、不明」(日本古典文學大系)としながらも賢くない者、卑下したことばと解し、「上代日本文學と中國文學下」では、往塵・垂毛・則聖・品生などの語と共に中國語として一般に用いられたか否か疑わしい用語の例の中に擧げておられる。いずれにしても宴集に列なる人々のことを上句と下句とに視點をかえていつたまでであつて、去・陪の對比は意味的には去・來の對比であり、陪の語感には來の意味が感覺的に潛在しており、そのふくらみが去・來よりもやわらかみを感じさせる。陪といえは「陪紫宸」「陪瀛州趣」(ともに懷風藻)、「艷年從官陪層祕」(文華秀麗集)のごとく、禁中に關する語が下に約束される可能性があり、表現としてより確かなものになる。従つて「去」の字との對比も「來」よりは強く響き合うものがある。

懷風藻に指示的反對概念の對が多いといつても、それは凌雲集・文華秀麗集との比較の上でいえることである。むしろいまいくつかの例で述べたように、句中に用いられている語が持つ感覺的なふくらみを介在させての對比が普通であつた。考えてみれば、指示的反對概念の對は「昔惜河難越、今傷漢易施」(懷風藻・百濟和麻呂)、「水上浮萍豈有根、風前飛絮本無蒂」(文華秀麗集・朝鹿取)のように、上句を讀んだとき、相對應する語が下句にあることを直觀的に豫想することが不可能ではない。それはおおむね讀者の立場からいえば、無意識的、瞬間的な潛在的直觀である場合がむしろ普通であらう。下句を讀みおえたときに生じた對偶の安定感が、詩情を效果的にたしかなものにする。その心理的な過程は創作者の立場に

たつてもほぼ同様なことがいえると思う。ただ異なるのは、下句からさきに創作されることがあり得ることだけである。ところが、前の特にBに屬する對比は、單に形態的な對の安定性があるばかりでなく、上句から下句へ、下句から上句へと反轉することによつて、よりたしかな映像を心理的に構成する。上句によるイメージと下句によるイメージとの二重寫的的手法、そこに感覺的な詩情のよりこまやかな描寫が期待される。しかしながら前述したように、文鏡祕府論の「的名對」に相當する述語的な機能を持つ語の對比は懷風藻に比較的多く、文華秀麗集に至るまでに減少の傾向にある。しかしそれは決して對句そのものが少なくなつたのではなく、對としては質的に高次なものへと變化していつたのであつた。

三、用語について

ところで、この減少の傾向は用語の面についてもいえそうである。懷風藻に二例以上の用例を見る語、一七五語について多い順に四例までのものを示すと（數字は用語例の數）

用 語	懷 風 藻	雲 文 華 文選(詩)	懷風藻の用語を含む詩番號(大野本による)
1 山 水	7	1	39 78 11 90 106 31 99
2 琴 樽	〃		95 62 86 84 75 88
3 芳 春	〃	2	24 21 21 78 70 8
4 仁 智	〃	1	21 36 14 43 9 39
5 淑 氣	6	2	20 59 24 78 30 29
6 欲 知	〃	1 (欲識)	83 85 37 24 70 108
7 明 月	5	5	29 51 85 39 9 50
8 風 月	〃	21	109 3 51 98 71 89
9 山 川	〃	5	9 115 20 68 62 77
10 神 仙	〃	3	85 20 38 48 105
11 梅 花	4		106 37 50 38 109

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	
留	帝	瑤	臨	流	上	松	春	文	聖	今	忘	皇	白	
連	里	池	水	水	林	風	色	酒	衿	日	歸	恩	雲	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4
1 (流連)				1	1		1				5		3	
		1			2	2	1	3			3	1		9
1	〔銘〕		〔賦〕											
	1		1		1	1	2	1	1		4	4	2	7
5	90	40	59	57	38	19	57	30	70	50	88	55	77	
20	105	36	84	54	20	31	75	20	55	19	51	37	36	
21	85	24	19	32	75	38	19	37	40	80	34	14	112	
72	75	21	51	92	18	115	20	101	78	40	82	81	89	

○ 参考までに文選索引によつて、その用例数を下段に示した。

○ 「」内は文選の詩・樂府以外の用例のもの。

注6

○ 懷風藻原本になかつたと考えられる山中・歎老の二首の用語は調査の対象としなかつた。

これらの用語の中、文選詩に用例のないものは「2琴樽」を除いてすべて六朝詩にその用例を見いだすことができる。

6 欲知 欲知船度處、當看荷葉開。(玉臺新詠、皇太子簡文・同庚肩吾四詠)

欲知心不平、君看黛眉聚。(同前、同前・賦「樂器名」得「空篴」)

欲知有所思、停織復躊躇。(同前、梁武帝、夏歌)

8 風月 以茲山水地、留連風月心。(隋、陳子良・夏晚尋「于政世」置酒賦韻)

年代俄成昔、唯餘風月同。(隋、段君彥・過故鄉)
無事逐梅花、空教信楊柳。(玉臺新詠、沈約・初春)

11 梅花
柳絮時依酒、梅花乍入衣。(同前、湘東王釋・和劉上黃)

蘭葉始滿地、梅花已落枝。(同前、梁武帝・春歌)

何時一可見、更得似梅花。(同前、皇太子簡文・雜題)

梅花自爛發、百舌早迎春。(同前、王叔英婦・暮寒)

16 聖衿
聖襟惜岐路、曲宴關蘭堂。(梁、劉孝綽・餞張惠紹・應令)

17 文酒
始可結交者、文酒滿金堂。(梁、吳均・酬蕭新浦王・洗馬)

23 瑤池
箕風入桂露、璧月滿瑤池。(梁、吳均・秋念)

24 帝里
寧知辭帝里、無復合歡心。(隋、吳絳仙・謝賜合歡果)

「2 琴樽」は六朝詩のすべてにあたつてみたわけではないが、六朝詩における用例はいまだ管見に入らない。盧照鄰の「由來棄銅墨、本自重琴尊」(三月曲水宴得尊字)、杜審言の「琴樽橫宴集、巖谷臥詞場」(贈崔融)など、それは初唐に入るとしばしば散見されるのはたしかであり、王勃の詩を例にとれば

城闕居年滿、琴樽俗事稀。(送盧主簿)

琴樽方待興、竹樹已迎曛。(山居晚眺贈王道士)

琴尊唯待處、風月自相尋。(贈李十四)

などの使用例を見る。懷風藻の「琴樽」の例がいずれも懷風藻後期の作品に限られているので、懷風藻後期にみられる初唐詩の影響の用語面における顯著な例のひとつといえよう。なお、王勃の詩にはさきに表示した諸語に關するものに限つていえば、1 山水(日落水靜、偽君起松聲。詠風)、「何如山水路、對面即飛花。林塘懷友」・7 明月(早是他鄉值早秋、

江亭。明月帶江流。「秋江送別」。「復閣重樓向浦開、秋風明月度江來。——寒夜懷友——」。「明月沈珠浦、秋風濯錦川。——重別薛華——」。「林泉明月在、詩酒故人同。——秋日仙遊觀贈道士——」。「去此近城闕、青山明月初。——晚屆鳳州——」。「8 風月（林塘風月賞、應待故人來。——別人——）」。「琴樽唯待處、風月自相尋。——贈李十四——」。「9 山川（物外山川近、晴初景霽新。——登城春望——）」。「山川殊未已、行路方悠哉。——扶風畫眉離京浸遠——」。「山川雲霧裏、遊子幾時還。——普安建陰題壁——」。「誰謂波瀾纔一水、已覺山川是兩鄉。——秋江送別——」。「12 白雲（松吟白雲際、桂馥清谿裏。——上巳浮江宴、韻得趾字——）」。「蒼虬不可見、空望白雲衢。——尋道觀——」。「21 流水（流水抽奇弄、崩雲瀾芳牒。——春日宴樂遊園、韻得接字——）」。「24 帝里（帝里金莖去、扶風石柱來。——扶風畫眉離京浸遠——）」。「帝里寒光盡、神臯春望泱。——春日宴樂遊園、韻得接字——）」などの用例がみられる。

さきに表示した語の懷風藻・凌雲集・文華秀麗集の用例は、文選詩との間に、單にこれらの語を使用したというばかりでなく他の語や句法などの點に類似性があつて、兩者の間の近づきの度合いが濃厚なもの、（それを類句というなら）それが類句であるか模倣句であるかの判定は極めてむづかしいが、ともかくそうした點の認められる句はそれほど多くない。いま例として、懷風藻・凌雲集・文華秀麗集・文選を通じて似かよつた數の用例をみる「15 今日」を示してみよう。（内は大野本懷風藻の詩番號。）

欲知今日賞、咸有不歸情。（50）

今日良醉德、誰言湛露恩。（19）

今日夢淵淵、遺響千年流。（80）

今日足忘德、勿言唐帝民。（40）

今日優遊何所樂、群臣同有釣璜心。（凌雲集、賀陽豐年・晚夏神泉苑釣臺同勒、深臨陰心、應製）

林泉舊邸久陰陰、今日三秋錫再臨。（同前、藤原冬嗣・奉和聖製宿舊宮、應製）

今日生死別、何年問白頭。（同前、淡海福長滿・被別豐後藤太守）

倒絶兮^今。悽^今。日。一。淚。潺。湲。兮。想^昔時。一。(同前、桑原宮作・伏枕吟)

藥耐朝風^今。日。笑。榮。靄。夕。露。此。時。寒。一。(同前、嵯峨帝・九月九日於神泉苑宴群臣各賦一物得秋菊)

雲嶺禪局人蹤絶、昔將^今。日。再。攀。登。一。(文華秀麗集、嵯峨帝・過梵釋寺)

何圖一損^三台門貴、^今。日。高。車。過。下。官。一。(同前、勇文繼・春日左將軍臨況)

古來蒿里爲誰邑、^今。日。松。門。閉。鬼。延。一。(同前、桑原赤・奉和傷野女侍中)

^今。日。不。極。歡、含情欲待誰。一。(文選、王仲宣・公讌)

淹留昔時歡、復增^今。日。歎。一。(同前、謝靈運・登臨海嶠與從弟惠連)

^今。日。良。宴。會、歡樂難具陳。一。(同前、古詩)

自從食^三萍來、唯見^今。日。美。一。(同前、謝靈運、擬魏太子鄴中集)

このように「今日」という語を含む本邦詩句と文選詩句との間には、直接の關連は見出せない。

こうした點は前掲の諸語について同様に見えることである。全體を通して類似的なものをさがせば、⁽²⁰⁾姑射遁^三太賓、^三嵯峨索^三神仙^一（服食求^三神仙^一、多爲藥所誤。古詩）・⁽²¹⁾神仙非^三存意^一、廣濟是攸^三同^一（壽命非^三松喬^一、誰能得^三神仙^一。魏文帝、芙蓉池作）のごときものしか見出せない。このことで文選の影響が稀薄であるとは無論いえないけれども、前掲の諸語の用法上に関しては、一句または一聯の比較の上でそれらの語を中心として見るとき、文選詩を直接の下敷きとしたことが歴然とわかる用い方はしていない。それがすぐどんな影響關係にあるかということの意味にまで言及するのは早急にはなし得ないが、一方には先學の指摘された多くの文選詩からの類句や模倣句があるのを思いあわせれば、前に示した諸語に關する限り、當時の詩人達には彼等なりに消化し得た語であつたろうと考えられる。特に懷風藻においては

聖袞愛韶景、山水翫芳春。

78

欲知閑居趣、來尋山水幽。

39

帝里烟雲乘季月、王家山水送秋光。

90

琴樽猶未遊、明月照河濱。

98

琴樽何日斷、醉裏不忘歸。	88	臨水開良宴、泛爵賞芳春。	59
玉燭凝紫宮、淑氣潤芳春。	24	聖衿愛良節、仁趣動芳春。	40
聖衿感淑氣、高會啓芳春。	70	豈若聽覽陳、仁智寓山川。	20
留連仁智間、縱賞如談倫。	25	帝堯叶仁智、仙蹕玩山川。	36
欲知得性所、來尋仁智情。	9	淑氣浮高閣、梅花灼景春。	37
欲知神仙會、青鳥入瓊樓。	85	欲知今日賞、咸有不歸情。	50
松風韻添詠、梅花薰帶身。	38	忘歸待明月、何憂夜漏深。	51
馳心悵望白雲天、寄語徘徊明月前。	89	近江惟帝里、裨叡是神仙。	105
豈獨瑤池上、方唱白雲篇。	36	絲竹時盤桓、文酒乍留連。	20
帝里浮春色、上林開景華。	75		

四、おわりに

前述したように凌雲集・文華秀麗集には懷風藻によく用いられた語について、それほど多くは用いられていない。前表に示した諸語によるいいまわしは、平安初期の詩人達には陳腐なものに思えたであろう。このような用語の變遷を述語的性格の語の對——いわゆる「的名對」——の變化の様相と思えば、凌雲集・文華秀麗集には懷風藻からの脱皮を意味するものが實作の上に見られ、そこに平安初期への詩風の變遷の一端を見ることができると思う。本邦詩と中國詩との關係は上代詩には六朝詩を中心として初唐詩の攝取が見られ、平安初頭の詩には初唐盛唐よりさらに中唐の詩の一部

に及ぶ影響関係がある。^{注7}上代から平安初期の詩への變遷の過程には、もちろん中國詩の影響が大いにあずかつているには相違ないであろうけれども、凌雲集の序文に

臣今所_レ集、掩_ニ其瑕疵_一、舉_ニ其警奇_一、以表_ニ一篇_一、盡_レ善之未_レ易、……

とあり、文華秀麗集の序文に

或氣骨彌高、諸_ニ風騷於聲律_一、或輕清漸長、映_ニ綺靡於艷流_一。可_レ謂_ニ駘變_一椎而增_レ華、氷生_レ水以加_レ厲。

とあるのは、平安初期の詩が中國詩の攝取受容をはかりつゝ、一方においては前代の詩からの主體的なあるいは意圖的な脱化をしていることを暗示していると解釋したいのである。

注1 序文の末尾に「于時天平勝寶三年歲在辛卯冬十一月也」とある。

注2 日本古典文學大系第六九卷解説。

注3 序文の末尾に、「天長四年五月十四日」とある。

注4 岡田正之博士著・日本漢文學史。太田青丘博士稿・懷風藻と中國の詩（解釋と鑑賞・昭和三十年九月號）

注5 日本詩話叢書所收。

注6 小島憲之博士著・上代日本文學と中國文學、下。

注7 大野保博士著・懷風の研究。前掲書など。

（都立石神井高校教諭）